

アトリエ 琉游舎 だより 117号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2021年11月3日発行

十月は小春の天気 草も青くなり梅もつぼみぬ

- 吉田兼好「徒然草155段」の一節です。旧暦十月は今の11月の頃、いわゆる小春日和に草も青くなり梅もつぼみを付けたと言う描写です。晩秋から初冬に向かう寒さの中でのどかな日だまりを感じさせる言葉です。ところが彼はもっと冷静に自然の移ろいを観ていたのです。
- 小春日和の描写の後に、木の葉が落ちるのは古い葉が落ちてから芽が出るのではなく、下から芽ぐんで張ってくるのに堪えられなくて落ちるのである。と述べています。小春日和は季節の流れの一休みではなく、次の変化のための準備の気候と兼好は見ているようです。
- 155段の要旨は四季には定まった順序はあるが、生老病死は突然やって来ると言う鎌倉時代の知識人の思想、無常（無情）感を語ったものと思われます。自然の変化の捉え方を春が終って夏が来るのではなく春は春の内に夏の気配を作り出していると見ています。今の結果は既にその原因を前の結果が包摂しているという縁起の法則に則った無常感です。これに従えば生死についても、死は突然ではなく生のうちに既に死が包摂されているとみるべきなのですが、生死に関しては人は無常感で見ようとしないと言っています。兼好は自然の変化を縁起（無常感）で見ても、人は死をものあわれ（無情感）で見ると語っているようです。
- 最近の季節の移ろいは、極端に言えば春と秋がなくなり冬と夏だけになってしまったような気がします。清少納言や兼好法師が実感し言葉に残した自然の移ろいとものあわれは、いずれ書物の中のおとぎ話になってしまうのでしょうか。晩秋から初冬の頃の穏やかで暖かな天気を表す「小春日和」が冬の季語であることを忘れてしまう日も遠くないかもしれません。

木 金 土 日

11・12月スケジュール

月 火 水

4	5	6	7
映画会 お休み			写経会 13時半
11	12	13	14
映画会 13時半			
15	16	17	18
			映画会 13時半
22	23	24	25
			映画会 13時半
29	30	12月1日	2
	読書会 13時半		映画会 お休み
6	7	8	9
			映画会 13時半
			10
			11
			12

読書会

11月9・30日(火)
13時半

日蓮の「立正安国論」と消息文を読みます。テキストもすべてご用意。お気軽にどうぞ。

写経会

11月7日(日)
12月5日(日)
13時半

般若心経・自我偈・観音偈の手本を用意しています。

11月4日12月2日(木)
映画会
お休みします

企業のオーナーは功成名を遂げると何かを残したくなるものなのではないでしょうか。有り余る創業者利益で球団を買ったり、美術コレクション収集のための美術館を作ったり、とスポーツ系か芸術系の大檀那になることが多いように思えます。私がかつて広告代理店の営業だったときは、オーナークライアントがスポンサーとなったチームの応援にしばしば動員され、美術館のイベントに賑やかしでかり出されたこともありましたが、本来は自腹で最上の球団の応援のために野球観戦し、どうしても見たい絵があるから美術館に行くのですが、時間外にも休日勤務にもならず仕事のように仕事ではない、無料関係者パスを使っての観戦や鑑賞に慣れきってしまうと、好きだったスポーツや芸術もいつの間にか義務のようになって足が遠ざかるようです。

企業のオーナーがスポンサー（大檀那）となる事業で、私が仕事として関わった中でも特異な経験は豆撒きでした。創業者の命日にその一族が眠る寺院を取引業者およそ60社ばかりの人間が墓参りに訪れ、法要の後に境内に組まれた櫓の上から地元の人びとに向けて豆撒きをします。ただ豆を撒くのではなく、豪華な賞品が当たる抽選番号付きの豆です。毎年恒例のこの行事を皆さん楽しみにしているのでしょうか。有名人がいるわけでもないのに沢山の人が訪れます。私も60社の取引業者の一人として袴に袴を着せられて、櫓の上から豆を撒きました。節分の日テレビでよく見る相撲取りや歌舞伎役者が豆を撒く光景そのものです。当時は仕事と思って撒いていたつもりですが、どこか心の奥底で、高みから人に施しを与えているというような不遜でござう慢な気持ちが芽生えていなかったかどうか、今思い起こすと冷や汗ものです。と言うのも、先日終わったばかりの選挙で各党から聞こえてくる公約は教育費無料化、18歳までの子供に10万円給付、給付付き税額控除などなど。候補者たちが選挙カーの高みから得意満面に語る姿と、櫓の上から豆をばらまいていた私の姿が重なって見えてしまったのです。彼らは気持ちよさそうに税金をバラマキ、私も気持ちよさそうに豆をバラマキ。施しを与える檀那になることはそんなに気持ちよいことだったのでしょうか。

檀那は旦那とも書きます。旦那は妻が夫を言う時や、商家の主人、金持ちや身分のある人を敬って使う言葉となっていきます。原義はサンスクリット語 dāna (ダーナ) の音写で「施すこと」を意味しましたが、「布施を施す人」へと転化していき檀那 (ダーナ) となり、次第に金品を施す人 (経済的な援護者) へと意味を拡張し、さらに富裕な家の主人も旦那と呼ばれる現在の使われ方となりました。檀那も原義から大きく逸脱した仏教用語の一つです。「布施」は金品を施すことなどの物のやり取りを表す言葉ではないのです。

ダーナ (布施) はやすらぎの処 (彼岸) へ辿り着くための六つの実践徳目 (六波羅蜜) 「布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧」の真っ先に上げられる、最重要の項目です。お釈迦様が生きていた時代の仏教では生産・経済活動は一切禁じられていました。ですから生きていくためには食を乞い (乞食) 施しを受けなければならなかったのです。これが布施です。その場の光景は人が物をやり取りしている姿にしか見えませんから、交換 (経済) に還元される行為に見えてしまうことでしょう。例えば寺院などが布施を受け取る行為を説明するとき「私たち僧侶は教えを皆さんに施します。代わりに皆さんは私たちに金品 (布施) を施すのです」と語るはずですが、これは「教え」と「金品」の交換の話です。行き着くところは経済活動です。経済活動を禁じられていたところから始まった布施がいつの間にか経済活動そのものになってしまった矛盾が今私たちの知っている「布施」なのです。布施は何かの対価でも交換でもありません。「行ない」なのです。

お釈迦様に食を施した人たちはかの人の肉体生命を維持するために食を施したのではなく、お釈迦様の教えが未来永劫実践され続けるための行ないだったのです。「行ない」は縁起の法則のままにやすらぎの処に歩み続けることです。お釈迦様に食を施した人もダーナであり、施した食もダーナです。人や物がダーナではなくその行為それ自体がダーナ (布施) なのです。お釈迦様が生きていた原始仏教の時代のダーナは、持てる者が持たざる者に与え、与えられたものたちがそれを集団の中で分かち合うことで仏教教団 (教えの継承) を存続させてきました。これを肉体的な命から見れば、原始共産制に通じると見えるかも知れません。しかし根本的な違いがあります。原始共産制は人間の生命と集団の存続を目的とした経済政策ですが、布施の目的はお釈迦様の教えが永遠のいのちとなり生き続けることです。私たちはそれを行ないとして実践する者たちです。布施はそれ自体が目的で手段で結果であるような縁起法則に組み込まれた行ないなのです。だからそこに経済の入る余地はないはずですが、布施が集まると人はそれをあるがままにしておくことに我慢がならないようです。寺院は受け取った布施で豪華絢爛たる堂宇を建て、堂内を巨大な仏像や金箔で荘厳することが教えの継承と考えたのでしょうか、おかげで建物や仏像は今に継承され拝観や祈祷などで布施を稼ぎ出してくれます。今やお札や祈祷や壺や説法などありとあらゆる宗教商品は布施と交換可能です。行ないそのものである布施を何かと交換可能と考える仏教は「行ない」を金品に変えて何も「行なわない」仏教の騙りです。教えの代わりに物や権威や資本を継承して今に到った仏教は、どこで誤ってしまったのでしょうか。

この世で一番の大檀那は意外に思われるかもしれませんがお釈迦様です。お釈迦様は永遠の過去から未来まで、惜しみなく私たちに教えと慈悲の大盤振る舞いをして下さる大檀那です。選挙カーから税金を大盤振る舞いする者たちが「おれたちは日本国の大檀那だ」と嘯いても、彼らはバラマイタ税金 琉游舎：戸井 出琉・恭子 は必ず利息を付けて回収する取立て屋です。大檀那と取立て屋の見分けの お問い合わせ：0287-53-7848 08033508152 つかないこの国では、教えの檀那たらんと日々行ない続ける僧侶と、教えの 矢板市大槻2319-17 コリーナ矢板C-850 バラマキで布施を我が物とする僧侶の見分けも甚だ困難なことに違いありません。 メール：toi10lizuru@outlook.jp